

Title	保坂三郎君学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1975
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.47, No.1/2 (1975. 12) ,p.156- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19751200-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

保坂三郎君学位請求論文審査要旨

主論文 経塚論考

〔前編〕 経塚の起源は明らかでないが、現在最古の資料は寛弘四年八月十一日に、藤原道長が吉野の奥金峰山山上に埋納した経巻の一部とその経筒である。しかして該経筒の銘文中には經典を「法身舍利」として埋納することが明記されている。即ち道長の経塚は法身の舍利塔として造営されたのである。これは経塚本来のあり方を示す最も重要な記載であるが、従来は看過されていいる。恐らく道長の帰依厚く、金峰山へも行を共にした覺運の教化によるもので、これを縁として当時の宮廷貴族を大雄峰に誘ひ出し、釈尊の体験を己心中に現すべく身を挺している真摯な山臥の行に直接せしめた親切と思われる。

上に次ぐものは比叡山横川経塚である。これは横川の如法堂に

於いて円仁が書写した法華經を弥勒の世に伝へるべく、長元四年に覺超等が発願したもので、上東門院もこれに結縁された。しかしながら埋納の為の諸施設が竣工しているにもかかわらず、実際の埋納がそれより百五十年後であったことを想へば、覺超等の主旨は先人の偉業を追憶するにあつたものと思われる。この頃に及んでこのようなことがなされたのは、円仁が五台山の淨土教的な念佛を比叡山に移し、天台宗独特的念佛思想を発達させる発端を

作ったことが、峻厳な宗祖の教説よりも時流に投じたからと推察される。しかし普通には埋經を円仁の本願とする根拠に上の事実を挙げ、又武宗の廃仏を眼前にして、埋經の必要を痛感したであろうと臆測して、埋經の起源を円仁に比定するが、共に俗解に墜している。

之に対して道長の曾孫師通はその先蹟に従い、寛治二年と四年の二回に亘って金峰山上に埋納したが、その日記にはさした記載もなく、現存する寛治二年の願文には皇室及び一家一門の長寿、子孫の繁榮を祈念することに急で、内容的な深みは全くみられない。しかも時既に所謂「末法の最年」永承七年を三十五年も経過しており、都の周辺にも、地方にも問題が山積しているにもかかわらず、中央貴族の間には未だ末法思想を左程切実な問題として取上げていなかつたことが、その日記を通じて窺はれる。これは通説の如く経塚が必ずしも末法思想を背景としているものでないことを示すと共に、中央政権の座にあるものの無氣力無反省を示すものである。

しかし十一世紀末頃から全国的に普及するに至つた経塚に末法思想の影響が顕著にみられるることは諸先学の指摘された通りである。それを切実ならしめたのは一に「王法之澆薄」「仏法之陵遲」であり、それが世人を「厭離穢土」「欣求淨土」の念に馳り立てるのである。従つて穢土よりの疎開的性格を強く打ち出す経塚も出来するようになり、又淨土教の影響の顕著なものも見られる。そして遂には富士山頂に一切經を埋納する程熱病的なものも生ず

るに至った。一方平安時代末より鎌倉時代にかけて政権の要路にあつた藤原兼実の如きは前後五回に亘って経塚を造営しているけれども、それは単なる追善供養的なものであり、儀礼的なものであつたことが窺われる。その占地も多くは洛中の寺院の境内及至京洛に近き場所が選ばれている。しかも兼実が当時独自の専修念佛を提唱していた法然に帰依したことは、経塚に対し、ひいては伝統的仏教に対する批判ともみられよう。

我が国に仏教が伝来した当初の伽藍配置に於いて、仏舍利を奉安する意義を持つ塔は、寺域の枢要な位置を占めていたが、次第に裝飾的なものに変転したことは周知である。当初法身舍利塔たる意義に於いて當まれた経塚も亦次第に儀式的形骸的なものになつた点では軌を一にしている。そして経塚ばかりでなく平安文化を代表するもの——例へば道長の頃に定朝によつて成し遂げられた木彫的技術も、同じ頃「きはなく」なつた仮名も同じ命運をたどつてゐるのである。

〔後編〕 実物に即して調査した経塚研究上基礎的資料三十件程を年代順に収録した。

史、美術史の分野において貴重な資料を提供してきたし、歴史考古学の主要な対象とされ、從來の研究成果において見るべきものが多いことは、敢て多言を要さぬところである。

しかしながら、経塚という遺跡は「古墳」などに比較すればその規模がきわめて小さいために、計画的な発掘調査の対象とされる機会に乏しく、他方では群集する場合が多いにもかかわらず、地表からはその存在を確認しがたいなどの理由も加わつて、從來の資料は開墾であるとか、その他の土木工事による破壊にもとづいて偶然に発見されたものにすぎず、美術的工芸的な面において優れた遺品に富むために、遺物の研究は進んでいるが、遺跡に対する考究に欠けるところの多かったのは止むを得ぬところであつた。また経塚の造営を考えるにあたつては、わが国における仏教受容の実態とその意義に直接関聯するために、その間にきわめて難かしい問題が山積していることも、また改めて説くまでもなかろう。すなわち古代における仏教各宗派の教理を一応理解するといふ一事に限つてみても、その容易でないことは明白であり、いわんや釈尊の教説をきわめるということになればなおさらである。

そこで從来は美術史、工芸史的な研究において見るべきものが有るにせよ、経塚発生の理由、換言するならば果して経塚とは何かということになると、釈迦の入滅後五十六億七千万年を経てわれわれの世界に出現するといわれている弥勒如来の説法を受け、成仏しようと願う人たちのために如法経を地下に埋納したものと経文を書写して地中に埋納し、これに多くの仏像とか工芸品を加えたいわゆる「経塚」とその出土品は、古くからわが国の文化

する通説に従い、敢て一步を進めて検討を加えようと試みる者すら稀であったのである。かような状況下において、著者は古くから仏教教理をきわめんと努め、他方では考古学の研究に力を注ぎ、美術史学に関しても十分な理解と研鑽を加えるうちに、この経塚にまつわる諸問題の解明に没頭するに至つたものであつて、自ら述べているように、仏教教理に深くかかわる点であるとか、遺跡的研究において、なお将来にまづべき点を残しながらも、多年に亘って苦心收集したばう大な資料を自由に駆使しつつ、経塚と弥勒如来出現の思想との関係を解明しようと試みているのである。

さて、この論文は“前編”“後編”“註その他”的三冊より成り、さらに八冊の図版を加えた浩瀚な力作であるが、著者はまず前編—すなわち本論にあたる—において第一章藤原道長の経塚、第二章金峰山経塚の背景、第三章比叡山横川経塚、第四章経塚の歴史的背景(一)、第五章経塚の歴史的背景(二)、第六章藤原師通の経塚、第七章経塚と末法思想、第八章藤原時代末期の経塚、第九章九条兼実の経塚、第十章藤原時代の墳墓における經典の十章にわたつて詳論を試み、“結論”において研究の総括を述べている。

その内容をここに再現することは困難であるが、その概略を述べると、まず今日においてはわが国最古の経塚である吉野金峰山山頂に藤原道長によって営まれた経塚については江戸時代中期に発見されて現存する経筒の銘文に「以手自奉書写 妙法蓮華經一部八卷(中略) 般若心經一卷合十五卷 納之銅筐埋千金峰其上立

金銅燈樓 奉常燈 始自今日期竜華晨」とあるから、この経塚をもつて法身の舍利塔と考えていたことは明白であるとなし、次に比叡山横川につくられた慈覚大師円仁の経塚を第三章においてとりあげ、この経塚が大師の書写した法華經を弥勒の出世まで保存するのを目的とした点は認めうるけれども、同時にわが国の経塚が末法の世を憂慮した慈覚大師の本願によってはじまつたとする説に対しては、これに結縁された上東門院の願文とか、「如法堂銅筒記」などの現存する文献記録を検しても、そのように考へがたいことを明らかにしている。

第四、第五の両章では金峰山の経塚から横川の経塚のつくられるまで、すなわち寛弘四年(一〇〇七年)から長元元年(一〇三年)に及ぶ間のわが国仏教界について精緻な考察を加え、とくに横川の経塚に関しては慈覚大師円仁が經を書写した事実と、それを経塚の形をとつて埋納するに至るまでの間に長い時間の経過があることを指摘すると同時に、藤原時代における我国人—ながら公卿たち—の間には末法思想が決して切実なものとして考えられてはいなかつたことを論証している。これらの主張は経塚 자체とは少しく遊離した感もあるとはいえ、著者の我国仏教史研究に対する意欲と努力の跡を示すものである。

の願文（寛治二年七月廿七日とある）が現存しており、とくに後者の願文には、前半に当時の皇族、藤氏一門の人びとの延命息災除厄のために各種の經典を書写し、祈念供養したことが、後半にはそれとは別に、「手づから書写した金泥の妙法蓮華經開結十巻、般若心經、金剛寿命經等十二巻を銅筐に収めて埋納した趣が記されており、かの道長が埋納した銅製經筒の銘文を想い起させるものがある。しかも前段において「進則為思釈尊一乘之遺教、退亦為結慈氏三曾之來縁」と願意を述べ、これに対しても「願力最切」と記してはいるものの、後段には古典的美辞麗句を重畳して長々と「子孫之繁昌」を祈願し、前段の主旨はほとんどその間に埋没している始末であると述べ、さらには扶桑略記寛治三年十一月二十八日の記事などから、この師通が耳の病をわざらっていたことが知られる点も併せ考へる時、師通の場合は道長のそれに比して「除厄息災、延命長寿、子孫繁昌」を願う点が表面に出たものと思われるが、他方では道長から師通に至るわづか八十年の歳月の間ににおいてさえ、大きな変化が生じている事実を指摘している。

しかも師通においては、「末法」の思想すらほとんど現われていない点に意が注がれている。彼が願文の中で「只以祖考之旧業為望」と述べていることから推すならば、師通が埋經本来の意義を正しく理解していたとは思われず、金峰山、横川の埋經にも必ずしも末法思想に基き、弥勒の出世を願うという教理に根ざすものが強くは認められぬこととなるのである。

次に第七章は「經塚と末法思想」と題されているが、その内容

は従来一般に經塚の造営が末法思想にもとづくと見られてきたのに対し、すでに触れたように、当時の貴族の間においては、それが意外にも切実に考えられたことがなく、右の藤原師通の場合でも曾祖父道長のなした業を形式的に踏襲するのみで、埋經の意趣、或いは埋經の場の意義をどこまで反省しているか疑わしく、従つて内容的には遙かに低下したもので、文化凋落の相がこよなくあらわれていると断じている。

しかしながら、師通の金峰山埋經は寛治二、四年（一〇八八、一〇九〇年）のことであるのに、それに先立つ延久三年（一〇七年）在銘の伯耆大日寺瓦經、承暦三年（一〇七九年）在銘の筑前香椎宮別當護国寺の經筒、永保三年（一〇八三年）在銘大分県速見郡津波戸山出土經筒、応徳三年（一〇八六年）在銘備中倉敷安養寺經塚瓦經などによると、この間にも經塚の造られたことが知られ、とくに第一の伯耆大日寺瓦經には「干時釈迦如來末法延久三年歲次辛亥」とあり、經塚の遺物に「末法」の語が現われる初見であることは注意すべく、且つ道長の金峰山埋經（一〇〇七年）から七十年余の間に、かような広範囲の經塚の築造が行われるようになつたのは注目に値するところであつて、末法を実感せしめるような政治的な紊乱が改めて想起されるという。すなわち一〇五一、一〇八六年に相次いで前九、後三の両役が起り、永保元年（一〇八一年）には園城寺の焼打事件が起るなど、都の周辺に悪僧がはびこるに至るのであって、このような時勢に際して心ある者が次第に末法の世が到来したとの実感をもつに至つたかと

思われるのに、師通の埋經に際しての反省のなさを著者は痛烈に批判するのである。

第八章に進んで藤原時代末期の経塚についての検討がなされている。都には六勝寺が甕を競い、「造塔堅固」の時代でありながら、末法思想は急速に地方へ浸潤していった。その一端が経塚にもよく現われているわけで、特に注目すべきもののみを挙げて見ても、伯耆一宮経塚は一種の堅穴式石室のような構造を持つ最大級の経塚で、出土した経筒の銘文には「釈迦大師壬申歳入寂日本年代記康和五年癸未歳粗勘計年序二千五十二載也」と記されており、釈迦の入滅を壬申歳とする説をとり、正法、像法と共に千年とする藤原時代の通説に従い、末法にあるとの意識を明示するものとして注目される。

右の康和五年は一一〇三年で堀河天皇の代である。また伴出品に舟形光背状の鋳鋼板製の弥勒如来像があり、銘文に「值遇慈尊之出世、奉堀顯此經卷」とある点も重要な資料というべきであろう。次に甲斐の勝沼経塚とか筑前四王寺山の経塚群などの出土品を検すると、十二世紀に入って埋經の風が拡がり、次第に民衆化したことが観取されるのである。この時代の例としては山城鞍馬寺、紀伊紛河寺の経塚も挙げられる。

また「仏法の陵遲」「王法の澆薄」のもとにあって現世に希望を失い、穢土より經典を疎開するという性格をもつた経塚も現わるに至った。播磨極楽寺の裏山から発見された大量の瓦經などがそれで、康治年間（一一四二—一一四四年）の造営であること

に加えてその性格をも願文によって窺知しうるのである。次いで平治元年（一一五九年）には伊勢朝熊山の經ヶ峰経塚が當まれている。ここに納められた二面の和鏡には阿弥陀三尊來迎図が鏤刻されていて、本来は法身舍利塔であつた経塚が、ここに至つて迎接堂に変移していることが如実に知られるのは重要である。その一面の鏡には往生する者の屋舎を描いており、從来から平安後期の來迎図にはそれを描かないと一般に云われているから、本例がその最も早い例となるであろう。かの平治乱が勃発した時に当つて、経塚にこのような変化が認められる事実は、歴史の流れと仏教思想がいかに照應し、変化したかを如実に示すものといえる。

第九章においては藤原兼実の営んだ経塚がとり上げられる。養和元年（一一八一年）に姉の皇嘉門院が崩ずると、彼は法性寺の最勝金剛院の御墓所の近辺に自ら書写した如法經を埋め、その上に石の五輪塔を建てた。その詳細は彼の日記「玉葉」に見え、葬儀の一環としての儀式的行事、また経塚が追善供養の意味をもつた最初の例としても注目される。三長記の建永元年九月（一二〇六年）の条に見える慈円が良經のために、御墓所の傍に埋經したのも相似た例であるし、兼実自身も建久六年（一一九五年）に法性寺光明院に経塚を造営したが、これは明らかに母の加賀の追善供養のために書写した經典を埋納したものであった。丹後籠神社経塚の経筒の銘に「右為沙弥西念尊靈往生極樂也」とあるのも、この頃になると弥勒信仰から転じて追善供養的な意味の濃厚な埋經が多く行われたことを示すもので、その変化については、やは

り歴史的な時代背景の検討がなさるべきである。

すなわち兼実の時代には保元乱、平治乱平氏の滅亡と倫理綱常の紊乱が甚だしく、都の大火、飢饉がこの間に頻発するなど災害も発生した。他方、仏教界では旱天の慈雨ともいうべき法然の出現があり、兼実の如きも深く彼に帰依したが、広くこの時代を見れば埋經が諸種の作善の一つであり、特殊な功德という意味でしか理解されていなかったのである。

右に述べた如く、最勝金剛院の経塚が皇嘉門院の葬儀の一環として造営され、多分に追善供養的な面をもつことが推定されたので、著者は『平安時代の墳墓における經典』という一章を設けて「第十章」となし、平安時代の人ひとが埋葬に際して、經典にどのように対したかを考察している。すなわち古く寛和元年（九八五年）には慈惠大師良源が、自ら死後には墓穴上に石卒都婆を建て、塔内に諸真言を書写納入するよう指示したのをはじめとし、長元九年（一〇三六年）の後一条大皇陵では墓上の石卒都婆に陀羅尼を納め、広徳二年（一〇八五年）の白河天皇中宮賢子の場合も五輪塔内に銅板に墨書きした真言を納めるなど、それぞれ相似た葬法と經典類の取扱いを窺うるのである。

また久寿二年（一一五五年）に死んだ藤原忠通の室で兼実の母であつた宗子の場合は棺内に金泥法華經一部を、光明真言とか陀羅尼などの經典を金銅筒に入れて同じく棺内に納めたといい。これは伊勢朝熊山第三経塚の場合とよく似ている。養和元年（一一八一年）の皇嘉門院の場合も經典を入れた筒を棺内に納め上に石

卒都婆をたてた。これらを通観すると埋經は一種の作善であり、趣味的な色彩すら持つに至り、この頃の經塚造営はそのような特殊な功德という意味でも理解される事実に注目せざるをえないものである。

かくて著者は最後に「結論」として研究の成果をまとめている。すなわち、いささか重複の感もあるが、今日知られた最古の經塚である藤原道長の金峰山經塚は法身舍利塔として造られたのであり、講師覺運の方便的教化の一端である。年代的にこれに次ぐ師通の金峰山における埋經は「增長福寿」「息災延命」がその目的とされ「慈氏三会の來縁」を願うことさえ薄いといわねばならない。かように古い例をとつて考えてみると、わが国における經塚が末法を憂えた慈覺大師の本願によってはじまつたとする説は承認できぬこととなる。さらに意外にも、貴族の間においては、末法思想はさして切実な問題としてとり上げられていなかつたことも明らかとなる。しかも比叡山における山門寺門の分裂が決定的となり、教養的には最澄以来の顯密会通が行き詰って念佛思想に新らたな道を見出そうとする状況のもと、同時に円仁が神格化されてくる時期において、横川經塚に見るよう、比叡山において埋經が行われる機運が生じたのであった。

本論文の内容は概ね上記の通りであり、著者は經塚の起源を末法思想に基く弥勒信仰によるとする從来の説に対し疑問を懐き、むしろ最古の經塚である藤原道長の金峰山經塚が法身舍利塔であることを明らかにし、平安時代から鎌倉時代に亘る歴史の跡

彙報

(一六二) 一六二

をたどるとともに、仏教史との関連において経塚がいかに変遷したかを詳しく述べてある。

さらに特記すべきは、資料としてあわせ提出されている八冊の図版は、まことにぼう大且つ貴重な資料であり、これのみにおいて、すでに大きな学術的価値を認めることができる。

ただ著者の努力が未だ及ばざる部分のあることもまた当然であつて、たとえば経塚が造られる名山の嶺について、神が高山に天降りするという古代日本人の強い信仰を想起する時、さらに民族学的な研究が加えられるなどを期待したいのである。またさきに触れた収集資料とくに美術的価値の高い資料について、前編の本論中にはあまり考察が示されていない点が指摘されるかもしれません。しかし、これは後編一資料編において解説と検討が加えられていることを付記すべきであろう。

従つて著者がぼう大な資料を収集し、厳密かつ穩当な解釈を加え、多岐にわたる経塚研究の前進に新らかな歩を踏み出したことは、学界に寄与するところがきわめて大きいと云わざるをえない。よって著者に文学博士の学位を授与する価値あるものと認められる。

昭和四十六年二月十日

主査 慶應義塾大学文学部教授

文学博士 国史学担当

清水潤三

論文審査担当者 副査 慶應義塾大学名誉教授

藤井俊明 前漢の内朝制について

ドクトル・エス・レットル
東洋史学担当

副査 慶應義塾大学名誉教授
松本信広
文学博士 美学美術史担当
守屋謙二

昭和49年度東洋史専攻活動報告
一年新入生歓迎会 於 アルカディア
五月七日(火)四時二十分

五月四日(火)～五日(水)

東洋史旅行・千葉県岩井海岸

六月四日(火)～五日(水)

大学院研究会発表

(一)六月八日(土) 午後一時～四時、一〇五番教室

小野知多 太平天国の天京における女館制度

武者章 殿の王族に於ける『子』の位置

荒川研 人民公社史と中ソ論争

(二)六月十五日(土) 午後一時～四時、一〇五番教室

小見山春生 秦漢時代の人的結合組織から見た陳勝の乱について